

東北の林木育種

N0.47 1973.9

東北地方におけるスギのさし木事業の実際 (6)

太 田 昇

採穂台木の仕立方

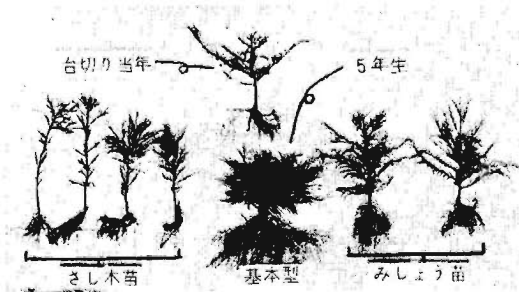
台木づくりの基本的な手順は前報^{21) 22)}でのべたので理解できたと思うが、管内の既設採穂園には台木づくりの不十分なものがかなりみられるので、少雪寒冷地や多雪地が多い当地方で最も実用的な樹型である低台仕立の中で、台木づくりの不十分なものを手なおしする方法と、これから台木を植える場合の植栽法を紹介する。

台木づくりの不十分なものの手なおし

採穂台木は発根しやすい多量のさし穂を専門に生産するものであるから、台木にする苗木は一般的には発根のよいさし木苗を利用すべきであるが、採穂園設定当時は園の造成事業を軌道にのせるため、やむをえずクローン増殖の容易なつぎ木苗を台木にしたものがかなり多く、それらはできるならさし木苗の台木に切り替えることがのぞましい。しかし、いまさら切り替えれといっても、5・6年もの長い間手塩にかけて育てたものを除却するのはいろいろな点で至難なことであるから、それなりの方策をこうじて活用する必要がある。

低台仕立の基本型と苗木の形態を示したのが写真—6である。

写真—6 低台仕立の基本型と苗木の形態

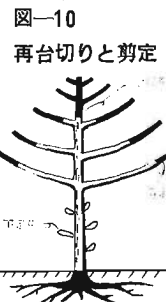


低台仕立用の苗木の形態は写真のみしょう苗のように主枝が地際から発達したものがよいが、苗木の発生と発育がみしょう苗とちがうさし木やつぎ木苗は、どうしても地際に枝のないいわゆるスネ長の苗木になる傾向があるので、基本型のように低い位置で台切りできなかったことや、台木づくりの初心者はいあまり低いところで台切りすると貴重な精英樹が枯れるのではないかという心配から、控え目な位置で台切りし、剪定をくりかえしてきたために、写真—7①のような台木づくりの不十分なものが多くみられるものと思う。

写真—7①の台木は萌芽枝ものび、さし穂もとれるので一応樹型はできたようにみえるが、基本型にくらべると地際に主枝がなくて腰高なので、点線aが地面になるようにしなければならない。すなわち、少雪で温暖なところでは問題ないが、積雪が70cm以上の多雪地では冬期間の雪の沈降圧で主枝がつけねから折れたり抜けたり、あるいは幹が折れるなど壊滅的な大被害をうけるおそれがある最も危険な樹型なので、台木づくりの不十分なものといえる。

雪害を防ぐには、下枝が雪でおされても地面につくような型であれば枝が折れたり、抜けたりしないので、このような台木はつぎの方法で手なおしする必要がある。

再度の台切り………図—10のように当初の台切り高より低いところで再度台切りし、主枝の一部も剪定して樹高を低くし、枝のない地際の幹から不



定芽の発生を促して将来の主枝として育てる。

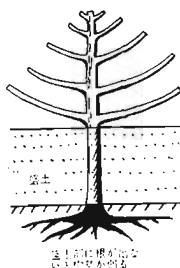
再台切りしても、精英樹によって不定芽の出やすいものと出にくいものがあり、不定芽の出やすいものでも植栽年次が早くて幹の木化が進んだものからは出にくいので早めに台切りする。また、一挙に台切りするより不定芽の発生ぐあいをみながら、2・3年くりかえすとよい。

つぎ木苗の台木は、つぎ穂よりもつぎ木台木の方から不定芽が出やすいので、精英樹の芽とつぎ木台木の芽を混同しないよう注意する。

不定芽が出にくいものや枝下が高いもの、あるいはつぎ木苗の台木で比較的高つぎされたものの手なおしには後述の斜め植えがよい。

盛 土……………枝下が比較的低いものは、図-11のように台木のまわりの土を樹冠下に盛土したり 客土してもよいが、大量の盛土・客土は労力の問題と台木の樹勢を弱めることになるので注意する。

図11—盛土

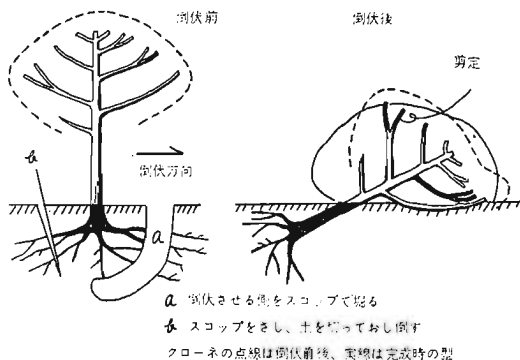


深か植え……………盛土と逆に、植穴を深くして植えなおしても

よいが、やはり労力と樹勢を弱める問題がある。

斜め植え……………再台切りや盛土・深か植えで手なおしできるのは、不定芽が出やすく比較的枝下の低いものに限定されるばかりでなく、労力や樹勢維持の点で問題がある。そこで図-12のような要領で台木を斜めに植えかえる方が作業も簡単に樹勢も弱めないのが実用的である。

図-12 倒伏前後の模式図



◇倒伏方法は、スコップで図-12のように台木の根元から30cmぐらいのところ、深さ40cmほどの溝を 台木を倒す側に掘り、反対側の根元に

スコップをさしテコを応用して台木を倒し、根と土のかたまりを足でふみくずしながら低台の樹型がつくれやすい適当な角度で倒伏させる。なお、根張りの大きい台木は根掘りをやや大き目にする。

斜め植えが台木の樹勢におよぼす悪影響は、ある程度根が切られても深か植えより少ないので、十分に下枝が地べたにつくようにする。

◇倒伏方向は、倒した台木の幹に太陽の直射光線があたると樹勢が弱るので、平坦地では樹冠の先が南側・根元が北側になるようにする。傾斜地では太陽光線よりも、台木の骨格が積雪の通行圧などで被害をうけないようにするのが大事であるから、樹冠の先を谷側に倒す必要がある。また、倒した台木のクローネの型と位置は倒す前のそれとちがってくるので、隣接台木との配置が一定になるよう同じ方向に倒した方が その後の管理上つごうがよい。

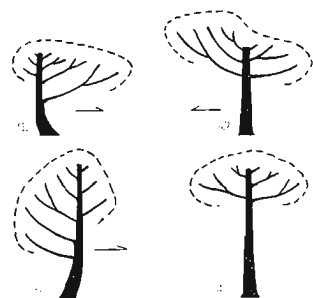
しかし、台木を倒す方向は 台木それぞれの枝ぶりや採穂拠点などの骨格をみて決めなければならない。すなわち、これまでさし穂をとってきた正常な採穂拠点でも、台木が倒されたために地面の方に面するようになったものは 早晚 枝勢がおとろえて枯れてしまう。また、倒伏前には下枝であったため枝の先きの方を剪定してつくった採穂拠点は、倒伏後には樹冠の上の方に飛び出るので、枝をみじかく切りつめ拠点をつくりなおす必要がある など、要するに主枝の長さや配置をみてどの方向に倒す方がより低台仕立の基本型にちかづけられるか、によって決める。したがって、台木によって骨格のできかたがちがうので倒伏方向もまちまちになるが、根掘り程度をかげんしながら、前述したように平坦地では南側に、傾斜地では谷側に倒すようにする。

図-13 台木の形態と倒伏方向

台木の形態と倒

伏方向を示したのが図-13である。

①は逆方向にも思われようが右側の主枝と拠点を活用するため図の方向にした。④はどちらでもよい。

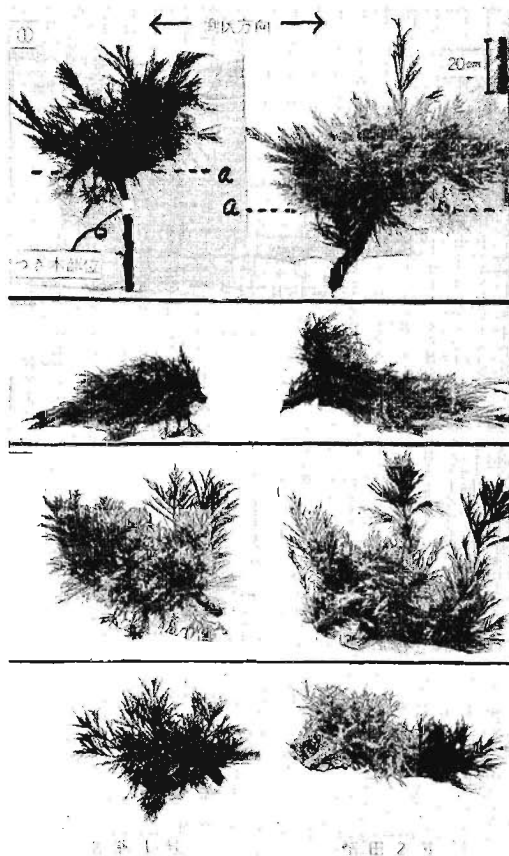


◇倒伏時期は、盛夏期でなければいつでもよいが、根雪時には活着できるよう 根雪1カ月前ころまでに終ることがのぞましい。

◇剪定整枝は、倒伏作業と同時に低台丸刈仕立の手順²¹⁾に準じて行なうが、倒伏当年の不定芽の発生と伸長は、前年までのそれよりおとるが翌春にはほぼ回復する。しかし、斜め植えされた台木の骨格は正常植えの形態にくらべて不正形であるから、不定芽や萌芽枝ののび方をみながら徐々に整えるようにする。

台木づくりの不十分なものを斜め植えし、樹型の手なおしをやった事例を示したのが写真—7である。

写真—7 斜め植えによる樹型の手なおし



①45年5月：倒伏直前 雪圧は想像以上の力があり、多雪地でこのような樹型の台木はたちまち枝抜け、幹折れの被害が出る

②45年5月：倒伏させて剪定整枝した。

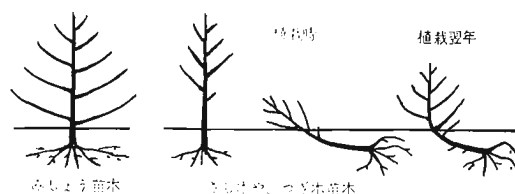
③46年5月：前年に倒した幹はそのままだが地べたをはっていた主枝はこうのように立上がつてのび出す。

④46年5月：数本ずつさし穂をとり、さらに拠点をつくるため剪定整枝した。このように低くすると雪害は発生しなくなる。

採穂台木の植栽方法

台木の植栽は一応おわったので、これから植えることは少ないだろうが、採穂園の体質改善や、第2次精英樹の選抜などで、やはり植栽する事例があるので、その際には図—14のような植栽方法がよいことを筆者ら²³⁾が確めたので附記する。

図—14 台木用苗木の斜め植



スネ長の苗木は、根を普通植え程度の深さにしながら枝のない幹を斜めに埋幹し、主枝が地際になる形態で植栽する。翌春に幹と枝が立ち上がったら主枝配置をみながら樹型誘導をはじめるとよい。

(つづく)

(東北林木育種場原種係長)

引用文献

- 21) 太田 昇：東北地方におけるスギのさし木事業の実際(4), 東北の林木育種, No.41, 1972.9
- 22) ———：同上(5), ——— No.43, 1973.1
- 23) 太田 昇・伊藤克郎・川村忠士：スギ採穂台木の低台匍伏型仕立, 昭和47年度青森県林業局林業技術研究集録, 1973.7

×××

×××

「東北地方におけるスギのさし木事業の実際」などと過大なテーマを掲げ、本誌の余白をうめあわせることをいいことにして6回ほど駄文をよせてきた。

これまでの内容は、さし木事業を進める上で根幹となる採穂園の育成管理、とりわけ採穂台木の仕立方を主体にのべたが、さし木事業全体からみると九牛の一毛にすぎない。採穂園の育成管理には台木の仕立方のほかに、病虫害や気象害に対する保護管理の問題。事業効率をたかめるための採穂園の経営規模とその有機的な経営仕組の問題。さらにはスギの育種事業が採穂園方式から採穂園方式に移行されてきたことと、予想外に発根のわるい精英樹が多いめに派生している採穂園の体質改善法など、むずかしい問題が沢山あるが、これらの解説はしばらく後まわしにし、次稿からは事業担当者の関心が強い、さし木法についてのべてみたい。

いずれテーマの責を負える者でないの、よろしく御鞭撻くださるようお願いいたします。

カラマツ採種木に対する

環状剥皮の結実促進効果

1、はじめに

当場のカラマツ採種園は昭和37年春造成され、平均胸高直径は12.6cm（48年1月調査）になっており、樹形は変則主幹形に仕立てるよう45年から一部断幹（予備断幹高約5m・最終断幹高4m）を行なっている。また、植栽間隔は5mであるがクローネが接触して来たので48年春50%の間伐を行なった。

このように樹体は大きくなってきており、43年～46年着花調査を行なったところでは、雌花の着生したクローン数は調査クローン244のうち、43年106、44年166、45年204、46年228でほとんどのクローンに雌花の着生はみられるようになった。しかし雌花の着生したクローン数は44年1、45年1、46年27で46年は増加しているものの全体からみれば、まだクローン数も少なく着生量もごくわずかであった。

このようなことから自然ではまだ十分種子が得られないので、次代検定林用種子を得るために46年6月環状剥皮による結実促進を行なった。今回はその結果について簡単に述べたい。

2、採種園の現況と施業概況

採種園の現況は表一に示した。

地表管理はクローバーと雑草による草生法で年3回の下刈を行なっている。

施肥は毎年行なっており、施肥量は「採種園の施業要領」（39林野造第1720号）に示された量より50%程度多い。

定期的な被害防除としては、先枯病・野鼠に対して行なっている。

表一 採種園の現況

設定年度	面積	ha当り本数	クローン数	仕立方	断幹高	胸高直径	土 壌	地形
昭和37年春	4.64	400	247	変則主幹型	4m	12.6cm	黒色火山灰土	平坦

3、実施方法

環状剥皮を行なったのは次代検定を対象とした62クローン410本であるが、クローン別の実施本数は表一2のように2本～9本でクローンにより異

なっている。

剥皮は地上高1m前後の所で半周2段とし、剥皮鎌を使用して46年6月11日～17日に行なった。

4、調査結果

球果の採取は47年9月19～21日に行ない、クローン毎に乾燥精選し1,000粒重を測定した。また47年春雌花の着生状況を調査した。

クローン毎の雌花の着生本数、球果の採取本数、球果数量、精選種子重量及び種子1,000粒重は表一2に示した。

まず、対象クローン62のうち36クローンに雌花の着生がみられたが、実際に球果を採取できたのは23クローンで、13クローンは雌花が着生したものの何らかの被害で球果にならなかったものと考えられる。この13クローンの雌花の着生数は1本当り1～2コでごく少なかった。

また、球果は採取したがシイナで充実種子の得られなかったものが2クローンあり、要するに種子の得られたのは21クローンであった。

次に、種子の総生産量は2,215g・採取木1本当りでは31.2g・剥皮木1本当り5.4gであった。

各クローンの種子の生産量を剥皮木1本当りの種子重量で比較してみると、最少0.2g・最多104.2gで著しい差があり、21クローンのうち12クローンは10g以下であった。

種子1000粒重についてみると、3.5～6.2gでクローンにより差があり、平均4.6g（1kg2174粒）で割合大きな種子が得られた。

5、おわりに

次代検定林用の種子を得るため、カラマツ採種木に対し環状剥皮による結実促進を行なったが、62クローン剥皮して21クローンに種子が得られたのみで十分目的を達することができなかった。

採種木はまだ樹形・樹体が完成されていないので、今後の種子生産に期待したいが、この様に結実促進を行なっても結実しないものと相当結実するものと著しくクローンによって差があるので、今後更に各クローンの結実性を検討し採種園の経営に役立てたい。

表-2 クローン別環状剥皮本数及び調査結果

クローン名	環状剥皮 本 数	雌花着生 本 数	球果採取 本 数	球果採取 数量(ヶ)	精 選 種 子 重 量 (g)			種子 1,000 粒重(g)	備 考
					総 量	剥皮木1 本当り	採取木1 本当り		
上 川10	8	1							
27	7	2							
34	7	7	7	4,290	352.6	50.4	50.4	4.6	
根 室1	6	2							
15	3	1	1	43	11.2	3.7	11.2	6.2	
24	7	2	2	37	8.4	1.2	4.2	5.5	
空 知1	7	1	1	23	3.2	0.5	3.2	4.7	
15	7	2	2	7	1.1	0.2	0.6	3.5	
石 狩7	8	5	5	294	25.5	3.2	5.1	5.7	
胆 振1	8	7	7	1,354	98.9	12.4	14.1	4.7	
4	8	2							
後 志22	4	1							
30	9	2							
金 木6	7	1							
盛 岡2	7	4	4	323	60.8	8.7	15.2	4.2	
3	8	4	4	19	4.0	0.5	1.0	4.2	
13	5	4	4	4,216	521.2	104.2	130.3	5.3	
15	6	1							
17	6	1	1	2	0				充実種子が得られなかった
川 井2	7	3	3	91	13.1	1.9	4.4	3.7	
3	6	2	2	1,393	289.7	48.3	144.9	4.1	
遠 野1	8	5	5	2,265	294.1	36.8	58.8	4.4	
2	4	1	1	103	23.9	6.0	23.9	4.4	
大 槌1	7	4	4	153	24.8	3.5	6.2	4.4	
3	7	4	4	259	48.3	6.9	12.1	4.0	
中新田3	8	1							
白 石11	8	6	6	2,674	111.7	14.0	18.6	4.7	
12	7	2	2	361	76.4	10.9	38.2	4.8	
13	7	1	1	626	152.6	21.8	152.6	4.5	
14	7	2	2	32	5.3	0.8	2.7	5.2	
南都留1	7	1							
吉 田3	7	1							
岩村田9	8	2	2	366	88.4	11.1	44.2	4.8	
諏 訪5	6	1	1	1	0				充実種子は得られなかった
15	8	2							
藪原 1	8	2							
計	410	90	71	18,932	2,215.2			(97.6)	
平 均						5.4	31.2	4.6	

(東北林木育種場経営係)

注) 1. 留萌7、網走11、十勝1、空知5、日高7、むつ5、6、野辺地1、盛岡14、16、18、白石15、松本102、駒ヶ根1、上田1、5、岩村田15、30、38、48、臼田3、6、11、13、諏訪8、伊那1号のクローンも2～8本について環状剥皮をしたがその効果は全然みられなかった。

2. 環状剥皮本数計410本には上記クローンの本数も含む。

〇〇〇 緑化事業についての考え方 〇〇〇

高 島 巖 雄

近年わが国の社会経済の高密化と、これに伴う生活環境の悪化等に起因して都市地域はもとより、農山村地域においても国土の緑化、および、生活環境の緑化に対する国民的要請がますます高まりつづける中で、当奥羽支場では環境緑化木の育種事業について、緑化検討グループ（経営課長をリーダーとした数人が）基本的な事項について、原案を作成し、これを経営課全員で討議し今後の進め方を決定してゆく方法をとっている。結論づけられたものはないが、その現在までにおける経過の概要について紹介したい。

1、対象樹種の決定

緑化樹木の需要は今後、私的需要よりも公共的需要が大きな比率を占めるであろうし、緑化樹のタイプとしては低木、中木については既に民間でもかなり生産が期待されており、技術的にも解明された面が多いのに対し、高木は未知の分野が広く、供給不足が考えられることから国立林木育種場でとりあげる対象樹種は高木を主とて、低木、中木を従とすべきであろう。そして立地条件とローカル色を考え、郷土品種からの選出が望ましいと思われる。その検討案は後述のとおりである。

2、育成官理方法の調査研究

低木、中木（ツツジ、サツキ類、ツバキ類、バラ等）については古来から園芸家等の手によって多くの品種がつくられており、これ以上育種場として取り上げる必要性はうすい。従って高木を中心とした対象樹種が決定したならばその苗木養成、目的にかなう仕立方、植付け方法、気象、病虫害対策等の究明を要する。

3、品種改良

次に品種の改良といっても全く新しいものを求めるのではなく、緑化樹木として目標に少しでもアプローチできるものが得られるならばという期待をもって、今までの林木育種の経験を生かしてゆこうと言う考えである。作業としては2、の育成管理の検討の過程で着手可能のものもあるだろうし、その究明が終わってから始まるものも出てくると思われる。以上いずれにしても高木で郷土樹種が主体であり、その目的から単木でなく、一定面

積の林分が形成される。こうした場合林業的取扱いが主となり、造園、土木、建築等の各面からの思索が加わってより効率的な環境緑化木の目的が果し得るであろう。吾々の検討はまだ緒についてばかりで未熟な面が多いが、各位の協力を得て少しでも地域環境の維持向上に役立てばと願っている次第である。

樹種の選択条件（案）

なるべく次の条件を満たすものから選択する。

(1) どんな樹種がいいか、

ア、まず郷土の樹種が望ましいこと、郷土樹種は永年その自然の環境条件になじんで出来たものである、一般的に気象その他の自然条件に抵抗性をもっている。

イ、単木または集団として美観を備え花葉が美しく期間が長い。

ウ、常緑樹では緑が、落葉樹では紅葉が美しい。

(2) 生理的形質

ア、公害に強い樹種であること。

公害に対して、樹種間で抵抗性に差があることは、一般的な事実となっておる。

植物にとっては好ましくないような、環境下に植えられる場合もあることから、大気汚染などの公害に強いということは、最も大きな要件とされる。

イ、乾燥および土壌硬化に強い。

ウ、病虫害、その他の害に強い。

エ、寒さに強く高温にも耐える。

(3) 育苗上の特性

ア、繁殖が容易である。（タネ、サシキ、ツギキ等による）

イ、育苗期間が短い。

ウ、移植が容易である。

(4) その他

ア、防火能力がある。（常緑樹）

イ、騒音防止に役立つ。

以上について検討をした結果次の樹種がリストにあがった。

（奥羽支場種苗係長）

山形県の郷土樹種を中心とした緑化樹木のリスト（案）

区 分	樹 種	選 択 理 由
低 木	ユキツバキ	積雪地域に分布、耐雪性がある。
	ニシキギ	紅葉が美しい。
中 木	コマユミ	果実、紅葉が美しい。
	ナナカマド	果実、紅葉が美しい。
高 木	ミネカエデ	紅葉が美しい。
	シラカンバ	白い樹はだ、みどりの葉が美しく、また、繁殖が容易である。
	ホホノキ	繁殖が容易である。
	コブシ	早春の花が美しい。
	ハクウンボク	花が美しい。
	クスギ	繁殖が容易であり紅葉が美しい。
	ブナ	" "
	ネムノキ	淡紅の花美しく、砂地、瘠地の植栽用に適しておる。
	イチヨウ	街路樹として美しく公害にも強い。
	メタセコイヤ	塩風には弱い、大気汚染に強い。
	ユリノキ	公害に強く、街路樹やそのほか用途が広い。
	トゲナシニセアカシヤ	街路樹として公害にも強い。
	ニオイヒバ	耐寒性あって樹形がよく繁殖が容易である。
	イタヤカエデ	紅葉が美しく、壮大樹形になる。
	ヒツコリー	繁殖が容易である。
	みどりスギ	冬のみどり等が美しい。

◇ 林木育種協議会便り ◇

遠 藤 昭 太

本年度の東北基本区林木育種協議会は去る7月11日～13日、林野庁、林業試験場、県、民間林業団体などの育種関係者約60名が参加して開催された。

会議は仙台市で、現地討議は青森営林局石巻営林署石峠スギ遺伝子保存林および同署牧の崎国有林、マキノサキスギ天然林（マキノサキスギは表日本における北限のスギ天然林）で行なわれた。

会議においては、国の育種場が行なう林木の病・虫害抵抗性育種について東北林木育種場から説明があり、次いで林木育種事業の長期計画、採種園の体質改善、東北地方におけるさし木の方向、採種園産種子の採取とその取扱、採種園産種子による育苗上の問題点、育種種苗の普及、抵抗性個体の選出と早期検定など多くの育種事業実行上の

問題が協議された。また各県から種子の貯蔵施設、採種穂園の管理費、採種園の体質改善費、人件費などに対する国庫補助について要望があった。

以上のうち、林木の病・虫害抵抗性育種、東北地方におけるさし木の方向、育種種苗の普及について述べたい。

1 林木の病・虫害抵抗性育種について

国立林木育種場において病・虫害抵抗性育種事業を実施する場合の抵抗性個体の選出、検定、原種の配布などの要領は次による。

(1) 対象樹種

スギ、ヒノキ、アカマツ、クロマツおよびトドマツとするが、必要と認められる場合は、これら以外の樹種についても対象とする。

(2) 対象病・虫害の種類

病害は、スギ赤枯病、カラマツ落葉病、カラマツ先枯病およびアカマツコブ病ならびにその他被害の大きいもの。

虫害は、スギノハダニ・スギノマルカイガラ・スギタマバエ・マツバノタマバエ・マツノシンクイムシ類・カラマツオオアブラムシ・トドマツアブラムシおよびトドマツハダニならびにその他被害の大きいもの。

(3) 抵抗性個体の選出

抵抗性個体は病・虫害の種類ごとに被害地や人為的被害地から選出する。被害地とは、植栽後2年以上を経過した造林地で、被害率80%以上の被害を受けた区域、人為的被害地とは、隔離した苗畑あるいは施設に苗木を植栽し、目的とする病原菌を接種感染あるいは害虫を接触伝はんさせ、被害を誘発させた場所である。

(4) 抵抗性の検定

抵抗性の検定は、通常検定または、特殊検定を行なう。通常検定とは、隔離された苗畑（あるいは林地）あるいは隣接地に影響のない被害発生が予想される林地に抵抗性検定林を設定して検定を行なう方法で、特殊検定とは施設等を利用して、実験的方法により検定を行なう方法である。

(5) 抵抗性クローンの決定および採種園、採種園の造成

育種場長は、抵抗性検定の結果により抵抗性クローンを決定して、営林局長または都道府県知事に通知し、営林局長または都道府県知事がこれらの抵抗性クローンにより採種園、採穂園を造成しようとするとき、または既設の採種園、採穂園を抵抗性クローンにより改良しようとするときは、育種場長の指導を受ける。

2 東北地方におけるさし木の方向について

さし木の問題については過去の協議会でも度々論じられて来たところで、これらを要約すると、①精英樹の発根性は予想に反し良いものが少なかった。②東北地方は寒冷で雨が少なくさし木には適さない気候である。③民間にさし木苗養成の経験者が少ない。④さし木苗は初期成長が良くない。などさし木苗の普及には不利な条件が多いので、事情によっては既設採穂園を採種園に転換することなどによって採穂園を縮小することも止むを得ない現状である。

しかし、さし木苗は、①育種上から遺伝的に親

の性質をそのまま受けつぐ。②造林上から寒風害に強い。という利点があるので普及には時間がかかるが更に努力しようという方向にある。具体的には①発根不良のクローンを除き採穂園の体質改善を行なう。②灌水、発根促進剤などにより発根率の向上をはかる。③民間に対しさし木技術の指導を行なう。④さし木苗のPRを行なう。などである。

なお、宮城県では、灌水施設（地温上昇の電熱線を設置）を利用したさし木法でよい成績をあげており、この方法の確立が期待されている。

3 育種種苗の普及について

育種種苗の普及については各県とも努力している。

採種園産種苗は年々その生産量が増加し、一部民間にも供給できるようになった。（青森、宮城、新潟）また、県有造林、民間造林用に育種苗を供給している例もある。（宮城）

採種園産苗木の成績は一般に評判はよいが、さし木苗については県で造林しその成績を確かめている段階で一般に初期成長がおそく、多雪地帯では雪害がみられ、今後の成果を待っているところである。

またさし穂を民間に供給して普及に努めている例もある。（宮城、新潟）

育種種苗の普及には、実際にその成績を現地でみせることが必要であり、次代検定林、展示林の造成が急がれる。

以上協議会の概要をのべたが、最後にこの会議を開催するにあたり、会場、宿泊、その他全般にわたり御世話をいただいた宮城県庁、宮城県林業試験場の関係者に対し厚く御礼申し上げる。

（東北林木育種場経営課長）

人 事 異 動

8月1日

東北林木育種場庶務課長	技	川口 敬恕
〃	〃	付 事 高橋 直治
奥羽支場庶務課長	技	木村 竜三
〃	〃	付 技 石垣清三郎

昭昭48年9月1発行

編 集 東 北 林 木 育 種 場
岩 手 県 岩 手 郡 滝 沢 村 滝 沢
T E L 019688(滝沢駅前局)―4517

印刷所 杜 陵 印 刷